

南山大学人類学研究所紀要発刊の辞

南山大学人類学研究所長 沼 沢 喜 市

南山大学人類学研究所は昭和24年9月1日に創設され、私とその初代所長に任命された。その年の6月に、ヨーロッパにおける留学から帰国して間もなかった私は、実際、その研究所の設立主旨も、また組織も十分には知らないまま、所長に就任したのであった。研究所設立の主旨や組織は、私が帰国する前に既にでき上っていた。

1950年12月15日付で、南山大学の初代学長A・パッヘ教授は、南山大学全般に関する英文の報告書の中で、人類学研究所については次ぎのように書いている。

「1949—人類学研究所(形質) 人類学及びその関連科目(考古学、民族学、フォルクローア、言語学、比較宗教学)は神言会の特色のひとつであり、これは世界的に著名な神言会員W・シュミット神父が所長をしているスイス・フリブールの有名な Anthropos Institut によっても知られる。南山大学には既にこれらの分野の研究のための小さい研究所があり、仕事を始めている。その所員には、シュミットが所長をしている研究所の数人のメンバーと、それにこれらの分野における指導的な日本人学者たちが加わっている。……」なお、1956年日付の邦文の「人類学研究所報告書」の中の「研究所設置とその沿革」には次ぎのように述べられている。「南山大学の経営者であるカトリック神言会は、ヨーロッパに於て早くより人類学研究に独自の活躍を遂げているが、殊に民俗学(これは民族学の誤り—沼沢)の世界的巨峯故ヴィルヘルム・シュミット博士は神言会員であり、ヴィーン大学教授並にアントロポス研究所長として斯学の推進力であった。1935年シュミット博士来日の折にも、己に日本に人類学研究所を設置の希望が出ていた。終戦後、南山大学設置を期に、学長直属研究所として発足。」

特に英文の報告書の中にもみられるように、南山大学に付属機関として設立された人類学研究所は「(形質)人類学」を重要研究科目としている。この点で南山大学の人類学研究所はW・シュミットが考えていたようなものとはまるでちがうものであった。シュミットの考えていた研究所は、民族学を中心とし、言語学と先史学を補助科学とした文化史的方向の文化人類学の研究所であった。実際に南山大学に設立された人類学研究所の組織とスタッフについて報告をうけたシュミットは、私えの書簡の中で大いに不満を述べていた。シュミットの当時の希望は Anthropos Institut の支部を日本に設立することであり、そのための所員もすでに予定されていた。

研究所の創立とともに、機関誌の発刊も計画されていた。“Man and Culture” という雑誌名も決められ、創刊号のための原稿も準備された。その雑誌は国際的なものとして、日本の学者たちのすぐれた研究を欧米の学界に紹介することもひとつの使命としていた。しかしこの創刊号はいろいろの事情のもとに、日の目をみず、当時の協力者の方々には、大へんご迷惑をおかけした。このたび南山大学人類学研究所紀要の創刊号の発刊にあたり、かつてご迷惑をおかけした方々におおび申し上げるとともに、この発刊を心からよろこび、これからの発展を期待するものである。